

5:1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。 5:2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。 5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。 5:4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。 5:5 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。 5:7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。 5:8 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。 5:9 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。 5:10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

はじめに

今月から、聖餐式の日曜日に新しいシリーズ説教が始まります。

今後は、毎月聖餐式の前に、マタイの福音書を学びます。

この福音書の最初から最後まで網羅することはせず、マタイの福音書におけるイエスの五大説教に焦点を当てます。

このシリーズを始める前に、まずマタイの福音書の著者とこの福音書が記された背景にある目的について押さえておきましょう。

1. マタイは取税人でした。

イスラエルは当時、ローマ帝国の支配下にありました。ローマの高官たちは、支配下にある地域で徴税する権利を競売で得ていました。彼らは、「収税吏」（しゅうぜいり）と呼ばれていました。

徴収した税からローマ帝国に5年間定額を支払い、残りは彼らの収益となります。

「収税吏」は、実際の徴税作業を現地の住民に委託していました。マタイは、その下請人のひとりでした。

毎年、徴税して「収税吏」に納めなければならない額が決まっており、残りは彼の取り分となります。

ユダヤ人はマタイを裏切り者呼ばわりし、必要以上に徴税する人物だと考えていましたが、彼はただ生計を立てようとしていただけです。間違っていたのは、この制度自体です。

マタイは、ユダヤ人社会では娼婦と同じ身分とみなされていました。

彼は、読み書きのできる人でした。

2. マタイは、新たないのちと新たな名を得ました。

マタイはもともと「レビ」という名でした。これは、マルコ 2 : 14 に記されています。しかし、イエスが「神の賜物」を意味するマタイという名に変えました。

マタイがもたらした賜物は、読み書きする能力と謙虚さでした。

この謙虚さが理由で、この福音書をマタイが記したという証拠は、福音書の中にはありません。

マタイは、地域教会に密着した内容を記しました。彼には教える賜物があったのです。

マタイは、イエスを救い主と信じるメシアニックジューで、世界宣教に心をささげていました。

マタイはこの福音書を、神の御国に関する教えにオープンなユダヤ人信徒に向けて書きました。

その主な目的は、教師たちを教えることです。

当時は字を読む人が少なかったので、教会指導者たちに自らのメッセージを伝えて役立ててもらうことを望んでいました。

初代教会は、ユダヤ人文化を土台として形成されており、現代でもそれは明らかです。

現代のイスラエルに住むユダヤ人がマタイの福音書を読んでも、そこにはユダヤ人文化が色濃く表れていると言うでしょう。

マタイの福音書には、他の福音書にはない独自の内容があります。

1章1-17節には、イエス・キリストからアブラハムまでさかのぼる系図が記されています。また、1:18-25にはヨセフに関する情報が記されています。さらに、10章に記されたイスラエル人の失われた羊を取り戻すという弟子たちの使命、そして20-22章と25章のいくつかのたとえ話などがそうです。

マタイはこの福音書を記すにあたり、おもに三種類の読み手を想定していました。弟子たち、群衆、そして律法の教師たち（律法学者やパリサイ派の人々）です。

3. マタイの学びの概要

今後のマタイの福音書の学びでは、イエスの五大説教に注目します。

それらの五大説教はどこにあるのでしょうか。そして、どのようにして見分けるのでしょうか。イエスは、ご自身を偉大な教師と呼ばれました。マタイは自身の福音書で、イエスの教えを見つける目印をつけてくれています。

まず、マタイ7:28を読みましょう。

マタイ 7:28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。

これは、イエスの大切な説教が終わったしるしです。

次に、マタイ5:1-2を読むと、どこからこの教えが始まったかがわかります。

マタイ 5:1-2

5:1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。5:2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

他の説教も同じように見つけることができます。

今後のシリーズで学ぶ予定の五大説教は、以下の通りです。

1. 山上の説教—マタイ 5-7 章
2. 十二弟子の派遣—マタイ 10 章
3. 御国に関するたとえ話—マタイ 13 章
4. 御国の交わりの中での生活—マタイ 18 章
5. イエスの再臨に関する教え—マタイ 24-25 章

では、さっそく「山上の説教」と呼ばれる第一の説教の学びに入りましょう。

イエスは、弟子たちを教えるために、群衆を離れられました。

この教えは、秘密の教えではありません。他の人たちも、聞こうと思えば聞けました。

教えの内容

イエスは教えの中で、3-12節では私たちの品性について言及しておられます。その後、7:27までで他6つのことを中心に語られました。

この教えの目的

なぜマタイはこれを書き残したのでしょうか。

それは、イエスの弟子となる人々に要求される基準を示すためでした。

これらの基準を満たすには、「新生」を経験しなければなりません。

それは、神のみが与えることのできる「神からのいのち」です。

「神からのいのち」をいただいていない人から、神のいのちが現されることはありません。

ここで取り上げているのは、「自然を超越したいのち」の実です。

クリスチャン著者のマイケル・グリーン氏は言います。「義なるお方とのつながりという根本なしに、義の実を实らせることはできない。」

イエスによる山上の説教は、イエスの本当の弟子でない人をふるいわけの役割を果たすと言えるでしょう。

また、神の聖霊によって与えられた私たちの心の炎を燃え上がらず教えとも言えます。

私たち、イエスを信じる信徒は、霊的な暗闇の中で明るく燃える存在でなければなりません。

では、クリスチャンの品性に関する最初の呼びかけから見ていきましょう。

1. 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」(マタイ 5:3)

この箇所は、私たちが心の貧しい者であれば、神の祝福と御国が約束されていると教えます。

では、「貧しい」とはどういう意味でしょう。

これは、縮む、すくむ、という動詞がもとになっています。

古典ギリシャ語では、この単語は道端でうずくまる物乞いを指します。

片手は施しを求めて差し出しますが、もう一方の手は顔を隠します。物乞いをしていることが恥ずかしいからです。

この同じ単語が、ルカ 16:20 でラザロの描写に用いられています。

しかし、イエスはここで物質的な貧困について語っておられるのではありません。イエスが語っておられるのは、霊的な貧困です。

心が貧しいとは、自分が神から離れていて霊的に貧しいことを認識することです。

イエス・キリストなしには、この世の人は皆、霊的な困窮者です。

どれほど教養があっても、裕福でも、身分が高くても、神におささげできるものは何もないのです。私たちは霊的には物乞いです。

イザヤ書 64:6 は、「私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」と語ります。

ルカ 18:9-14 には、「心の貧しい」人の姿が示されています。

ルカ 18:9-14

18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。

『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

パリサイ人は、心が傲慢でした。けれども、取税人は心が貧しい人でした。

神は、エジプトの奴隷生活から御民を導き出すようモーセを召されました。そのとき、モーセはそのような大きな任務に自分はふさわしくないし、できないと言いました。

神は、その謙虚さゆえに、モーセを用いることがおできになりました。(出エジプト 3:11)

偉大な使徒パウロは、ローマ 7:18 で、「私の肉のうちに善が住んでいない…」と言いました。ですから、霊的な貧困は、神の御国に入るために必要なものであることがわかります。

なぜイエスは、他の教えよりもまず謙虚さについて教えられたのでしょうか。

それは、クリスチャンになる基本条件だからです。

自分が霊的に困窮していると認め、謙虚になることが、クリスチャンになる第一歩です。

傲慢な人はクリスチャンになりません。

まず、謙虚にされる必要があります。

ジョン・マッカーサーは言いました。「謙虚さのないところにクリスチャン人生の恵みが育つことを期待するなら、ついでに、木のないところに実がなることも期待すればよい。」

今は亡きコリン・ペッカム師は、私が通っていたフェイス・ミッション・バイブルカレッジの学長でしたが、次のようなことをよくおっしゃいました。

「教会の最大の問題は、十字架につけられていない肉だ。」
それはどういう意味でしょう。

ガラテヤ 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

パウロはガラテヤの教会にこの手紙を書き送った際、信徒たちが日々古い生き方に死に、イエス・キリストにある新しいいのちによって生きているかを気にかけていました。

教会の最大の問題についてコリン・ペッカム師がこう語ったのも、多くのクリスチャンが聖霊の助けによって古い生き方に死に、新しいいのちによって生きるということをせずに、クリスチャン生活をつづけようとするからです。

古い生き方に死んで、新しいいのちに支配していただくというプロセスを踏まずに、聖霊による新しい人生は歩めません。

古い生き方から新しい生き方への移行は簡単ではありません。けれどもこれが、神の栄光のために実を結ぶ唯一の方法です。

その実は、私たちをとおして実る神の実だからです。私たちをとおして働かれる神のいのちなのです。

聖霊に支配していただかないとクリスチャン人生を生きていくことはできないと認めることが、勝利を取ってクリスチャン人生を生きるための第一歩です。

心が貧しいことの報いは、神からの祝福であり、神の御国への入国許可です。

心を砕かれて神のもとに来る人は、傷ついたままで去ることはありません。

神は、私たちが自らの貧しさに気づくことを望んでおられます。神は、ご自身の聖霊によって私たちが豊かにできるお方です。

今日、祝福を求めて神のもとに行きませんか。

ヤコブ 4:10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいませ。

祈って聖餐式に与りましょう。